

他人（ひと）に優しく

奨励	宮岡 信行【みやおか・のぶゆき】
奨励者紹介	日本キリスト教団北千里教会牧師 同志社香里中学校・高等学校講師

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所に来て来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りに払いします。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10章30—37節)

宮岡です。講師として週に2回は同志社香里中学校・高等学校で聖書を教えています。普段は千里ニュータウンという太陽の塔がある町の教会で牧師をしています。学生時代は大学聖歌隊でしたから、ピッチパイプの音になんだか懐かしい気持ちになりました。とは言っても、京都に来るのは久しぶりですし、何より同志社大学のチャペル・アワーに出席するのは初めてです。ですから、皆さんと一緒に礼拝できる今日という日をとても楽しみにしていました。皆さんの学びの一助となればと願って、「他人（ひと）に優しく」というお話をさせていただきます。

善いサマリア人のように他人に優しくしなさい

さて、誰でも一度は言われたことがあるかもしれません。「人に優しくしなさい。情けは人のためならず」と。そんなこと当たり前だと思っているかもしれませんが。あるいは、もう十分に他人に優しくしていると考えている人もおられるでしょう。かつて、私もそんな風に考えている一人でした。子どものころ、先生や大人から他人に優しくしなさいと言われて育ちました。兄弟げんかのときも、学校生活のなかでも。そして、牧師である父親には、ことさら繰り返言われていました。しかもそんなとき、引き合いに出されるのが、先ほど朗読された聖書の物語、善いサマリア人のたとえというイエスのたとえ話でした。

「隣人を自分のように愛するという教えがあるけれど、一体誰が私の隣人なのでしょう」と尋ねた律法学者に、イエスは一つのたとえ話で答えました。物語の主な登場人物はユダヤ人の旅人、祭司、レビ人という祭司の補助役、そしてサマリア人の4人でした。ユダヤ人のすぐ隣りに暮らしていたサマリア人でしたが、歴史的な経緯から両者に交流はほとんどなく、むしろ互いにいがみ合って暮らしていたそうです。ところが、強盗に襲われて行き倒れとなったユダヤ人を助けたのは、同じユダヤ人である祭司やレビ人ではなく、普段は犬猿の仲であるサマリア人であったというたとえ話です。そして、最後にイエスはこの物語の聞き手に対して、「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われました。つまり、目の前で困っている人に出会ったら、その人があなたの隣人であるから、行って助けてあげなさいということでしょうか。

実際、この物語に触発された日本人のなかには、アフガニスタンの人びとのために一生を捧げた岩村昇という医師がいたり、バングラデシュに渡った看護師がいたり、多くのクリスチャンが影響された有名な物語です。今なら、いわゆるボランティアというような感覚でしょうか。人に優しくする。困っている人を助ける。人間は動物とは違う社会性のある生き物のだから、その人間の世界が単なる弱肉強食であってはいけない。弱きを助け、強きを挫くような正義感に満ちた態度。そういう人物になるために、まず他人に優しくしなさいということが教えられています。

私自身、親が牧師であるという家庭環境だったため、この話はそれこそ耳にタコができるほど聞かされてきました。もちろん、反発することもありましたが、困っている人を助けることが良いことであるというのは、自明のことです。聞き流していたというのが正確なところでしょうか。学生時代には、いくつかのボランティアにかかりました。この社会のなかで小さくされ、弱くされている人たちがいるともいろいろと聞ききました。自分にできる範囲で、他人に優しくしようと努めてきたつもりです。自分はイエスの話に出てくるような祭司やレビ人にならず、サマリア人のような良い人になろう。人間として、それが当たり前のことだ。これが、自分で思っていた自分のイメージです。

他人に優しくされて自分の小ささに気がついた

けれども、2011年の3月の東日本大震災の時、自分の思ってもみなかった面を思い知らされることになりました。私は震災のことをニュースで知り、テレビを見ていました。私自身も、阪神淡路の大震災で祖父母が被災していますので、その大変さも少しは分かっているつもりでした。私の大学時代の友人が岩手の教会で牧師をしています。震災3日後に安否が分かりました。1週間経って、ボランティアに行った知り合いたちが、口々にその惨状を話してくれました。大変なことが起きた。自分にも何かできることをしなければ。そんな風に考えながらも、いざとなると募金を集めることくらいしか思い浮かびませんでした。素人の私一人の力はたかが知れていますし、仕事も家族のこともありましたから、泊まり込みでボランティアに行くこともできない。そんな理由から、大変だとは思いつつも、あつという間に2週間が過ぎていました。

その時、岩手の友人から突然電話がかかってきたのです。卒業以来、本当に久しぶりの電話でした。彼が言うには、毎年行っている春休みの子どものためのキャンプを今年もやりた。こういう時だからこそ、子どもたちをどこかに連れ出して、ゆっくり遊ばせてやりたい。けれどもこんな時には、人手もお金も足りないから助けてほしいというものでした。ちょうど春休みですから、大学生5人ぐらいを集めて、1週間ぐらいの子どもたちのキャンプを運営してほしいというのです。

私の第一印象と言えば酷いもので、「困ったなあ」ということでした。人を集め、お金を集め、そして自分の時間を1週間使う。それは少し難しいだろうと思っただけです。あれだけ他人に優しく、なんて聞いておきながら、また自分が牧師となり、また聖書の先生としてイエスの心意を受けて、困っている人を助けましようとしていながら、いざ自分の身に降りかかったとき、本当に困ってしまいました。出発の期限まで5日間。なんとか、お金を集め、母校の学生たちに声をかけ、また移動の手配をしました。その時点でも、まだ自分が行くなんて思いませんでした。自分の役割はコーディネーター的なものでいいだろうと勝手に思っていたのです。ところが前日になって、大学側から学生だけの派遣は難しく、責任をとる引率者が必要だということで、呼びかけ人の私が行くことになりました。子どもの春休みの予定も、当面の仕事も、何もかも投げ打って行かなければいけない。そんな私の気持ちは、とても人助けなんてものではなく、厄介ごとを頼まれた恨めしい気持ちでした。

道路や鉄道が寸断されたなか、飛行機で秋田経由、さらにレンタカーを借りての移動となり、疲れ果てて友人の教会にたどり着きました。もちろん、岩手県の沿岸部に近づくと、スーパーやコンビニには、牛乳やパンはおろか、アイスクリームやお惣菜もないような状況でした。ガソリンは行列に並んで給油し、空気中には腐ったような磯の香りが満ちていました。そんななか、ようやく被災地の人たちを助けなければという気持ちになり始めました。出迎えてくれた友人は、震災から20日間の疲れも見せず、遠くから来てくれたこと、無理な頼みを聞いてくれたことなどに感謝していました。そして、写真を使って被災状況の説明をしながら、「何もないけれど」と、地元でとれたリンゴと温かいお茶を出して歓迎してくれました。

そんな風に人に優しくされて、初めて自分の小ささに気づきました。この5日間抱えていた自分の小ささが、その傲慢さが痛いほど身に染みしました。本当に、自分は何を考えていたのか。猛烈な自己嫌悪に陥りました。小さいころから聞いていた物語の、祭司やレビ人が自分のことであって、サマリア人になんか到底なれるわけがない。そんなことを知らされました。他人に優しくなんて言うのは、誰もが知っている当たり前のことなのですが、どれだけ心がけていても、本当に行動できるかどうかは、大変難しく、躊躇するものだと知りまし

悲しみが優しさとなる

イエスのたとえ話で、祭司やレビ人たちは、行き倒れになった血だらけの病人に触らないように、向こう側を歩いていくような薄情な人間だと思っていました。でも、実際は当時の習慣として彼らは血に触ることを禁じられていましたし、万一死体に触ってしまえば、仕事を失うようなルールに縛られていたのです。彼らにもそれなりの理由があって、旅人の向こう側を通ったのでしょうか。その気持ちは私にもよく分かりました。

一方でサマリア人には、そんな制約はありません。それ以上に彼には自分たちがこれまで理不尽な理由で避けられ、のけ者にされている悲しみを十分に知っていました。誰からも見向きもされないような経験を、とても悲しんでいました。サマリア人に生まれただけで、口もきいてくれないユダヤ人に囲まれた生活。のけ者にされ、見捨てられるそういう悲しみを、痛いほど知っていたのです。この悲しみこそが彼の優しさとなり、その他人に優しくという気持ちが、人を守る強さになったのです。彼は、傷つ倒れた旅人に近寄り、そのトラブルを自らのものとして引き受け、介抱して安全な場所まで運びました。見捨てられる悲しみを十分に知っていたサマリア人には、もう誰も見捨てることができなかったのです。

他人に優しくするためには、私たち自身が無力であってはいけません。学びや経験を重ね、自らを強くすることで大切な人を守るようになります。弱肉強食ではない、強い者が弱い者を守る。確かにそういう面はいろいろな場面であります。けれども、それだけではないのです。他人に優しくするためには、自らの悲しみや痛みを正直に向き合うことも必要だと思います。悲しみや痛みを知る。悔しい経験、また恥ずかしい失敗をすること。そこから、私たちの悲しみが優しさとなり、その優しさは人を守る強さに変わっていくのです。十字架の上で誰よりも見捨てられる痛みを知るからこそ、すべての人を愛されたイエス様。そのイエス様の遺してくださったたとえ話。それが「善いサマリア人」のたとえ話に秘められている、イエス様のメッセージなのです。

皆さんのこれからの学びのうえに神の祝福を祈ります。これから皆さんが経験する悲しみすらも、優しさになることを、人を守る強さに変わることを切に願っています。